石屋がいちばん　　宮崎県

むかし、あるところに、石屋がいて、息子に子どもが生まれました。息子も石屋だったので、石屋は、孫も石屋になって、三代目を継いでほしいと思いました。

やがて、孫は、大きくなると、

「石屋はきらいだから、石屋にはならない」といいました。

そこで、石屋は、和尚さんのとこに行って、

「うちの孫は石屋にならないというんだが、石屋になるよう話してもらえませんかな」とたのみました。和尚さんは、石屋の孫をよんできました。

「おまえは、石屋はきらいだそうだが、何になるつもりだ」

「わたしは、馬に乗ったさむらいが好きです」

「なに、さむらいになりたい？さむらいの上には殿さまがいて、そこ行け、あそこ行けと命令されて、ちっとも頭が上がらんぞ」

「そんなら、わたしは、その殿さまになります」

「なに殿さまがよかろうか。殿さまの上には帝という人がおられるぞ」

「そんなら、わたしは、その帝になります」

「帝になってみよ。帝の上にはお日さまがおられるぞ」

「そんなら、わたしは、お日さまになります」

「なにお日さまがよかろうか。雲ができてかくすぞ」

「そんなら、わたしは、雲になります」

「なに雲がよかろうか。東から西から風がふいて来て、思うように動かれんぞ」

「そんなら、わたしは、風になります」

「なに風がよかろうか。西にも東にも大きな岩があって、西へ行けば頭を打ち、東へ行けばおでこを打つぞ」

「そんなら、わたしは、岩になります」

「なに岩がよかろうか。石やというえらいやつがおって、毎日毎日、こっちんこっちん切られるぞ」

「そんなら、わたしは、石屋になります」

「それ見ろ、やっぱり石屋がいちばんだろう」

そこで、孫も、親ゆずりの石屋になったということです。

村上郁再話

資料『半ぴのげな話』比江島重孝編／未来社